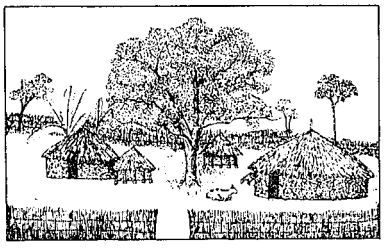
# アフリカ人農民の自然観



●細見真也

## ●はじめに

これから私がお話しする内容は，1963年の12月から翌年の1月にかけて，ほぼ2週間，ガーナ北部を旅行したとき，私が偶然に出会ったひとりのアフリカ人農夫とのあいだで交わした会話にもとづいております。

それは，きわめて短い言葉のやりとりにすぎないものではありましたが，その農夫が見せた態度とか表情は，その後の私に対して，重くて大きな疑問を生み，今日にいたるまで，忘れ難いものとなってきたといっても過言ではありません。

言い換えるなら，その農夫が私に訴え，語りかけた態度とか言葉のなかには，私の心を捉えて放さない何かがあったに違いないのです。

それが，いったい何であったのか，私は，その後20年以上にわたる歳月のなかで，常に，それを考え続け，同時にまた，その過程で得た自分の考えを少しずつ実践するよう努めてきました。

こうしたささやかな経験の積み重ねのなかから，ごく最近になって，私は，あの農夫が私に向かって訴えようとしたものが何であったのか，ということをようやく実感することができるようになりました。

もちろん，これは，私自身のいわば独断的な解釈にすぎません。しかし，それは，私の経験をとおして，それが実践に耐えるものであり，むしろ実践することによって，はじめて理解することができるものであることを自ら実感したという意味において，独善的で抽象的な解釈でないことだけは確言することができると思います。

そこで，私は，読者諸賢に対しても，小稿の内容をただ観念的に理解するよりも，それぞれの日常経験のなかで，具体的に実践していただき，そのうえで，文字どおり身をもって実感し，理解していただくよう願わざるをえないのです。

## ●ある農夫との出会い

すでに申しましたように，私は，当時，私が客員研究員として所属しておりましたガーナ大学の経済学科へ留学していた日本人学生のS君とともに，1963年末のクリスマス休暇を利用して，ガーナ北部の国境地方を旅行しました。

私たちは，この地方では比較的大きなボルガタンガという町にあるカソリック系の教会で1週間ばかり宿泊させてもらっていたのですが，この町で，たまたま私たちに話しかけてきたN君というアフリカ人の学生に道案内を頼んで，彼の生まれ故郷であるナガという村を訪ねてみることになりました。

この時期の北部地方では，唇も割れるほど空気が乾燥した乾季の最中ということもあって、私が運転する愛車のフォルクス・ワーゲンは，ひどい砂ぼこりを巻きあげながら，ナガ村へ通じる砂利道を走っておりました。

もうすぐ，村へ到着するというあたりで，車のハンドルを握っている私の目に，ひとりの貧しそうな農夫が道路わきの畑のなかに立っている姿が

飛び込んできました。

そこで早速，私は，車を止めて，その農夫に近づき，あたりに広がる畑を見わたしながら「今年の収穫は，どんな具合だったのですか」と尋ねてみました。すると，彼は，非常に悲しそうな表情と態度をもって「昨年は，雨季がいつやってくる

かということを正確に読み取ることができなかったので，ご覧のように，収穫はほとんど皆無という状態になってしまった」という意味のことを，N君の通訳を介して語ってくれたのです。

そのとき，私とその農夫とのあいだで交わされた言葉は，わずかそれだけのものにすぎませんでした。しかも，その言葉を聞いても，私は，ただ「かわいそうに……」という憐れみを感じただけで，それ以上に深く考えることもないままに，目的地であるナガ村へと急いだのです。

ようやく，ナガ村へ着いた私たちは，何はともあれ，村長宅を訪問することにしました。村長の家といっても，日干しレンガの壁を泥土のような漆喰で塗り固めただけの質素なものでしたが，狭く薄暗い通路と階段を通って案内された屋上には，私たちが訪ねてくることをあたかも予期していたかのように，村長はもとより，村の長老や老若男女の村びとたち多数が，すでに集まっておりました。

そこで，互いにひととおりのあいさつを終えたあと，村長は，ナガ村の「語り部」とみられる男を連れてきて村の歴史を語らせ，そのあとは村の楽隊が出てきて，彼らの演奏にあわせて村びとたちが思い思いに踊りを舞ってくれましたし，さらには，ミレットとかソルガムなどの穀物を蒸溜して造った地酒を私たちにすすめてくれたのです。

私たちが，初めて訪ねたナガ村において，これほどまでに盛大な歓迎を受けることができたのは，私たちを案内してくれたのがこの村の出身者であるN君だったということにも関係があったのかもしれません。しかし，私たちは，N君にとって，たとえどれほど大切な客人であったにしても，彼やナガ村の人びとの前からやがては姿を消すに違いない異邦人の旅行者にすぎないのです。

それにもかかわらず，このような私たちに対してさえも，あれほどまでに歓待してくれたということは，ナガ村の人びとが，私たちを異邦人というよりも，自分たちとおなじ人間とみなし，いわば仲間のひとりとして扱ってくれたことを意味しているのではなかったのか，と私には思われるのです。

その証拠に，「語り部」に対する謝礼として，私が差し出した1ポンド紙幣（当時の邦価1000円に相当）を村長は手を横に振って押しとどめ，その代わりに，2ペンス銅貨（同，約8円）を汗でうっすらと光っている「語り部」の額にはりつけてやるようにと私に指示したのです。

つまり，村長は，私の感謝の気持を文字どおりその精神において受け止めたのであり，金銭的な多寡という物質的な尺度をもって，私の行為を判断しようとはしなかったのです。

私たちが，互いに相手の気持を汲みとり，その行為を精神において理解しようとする態度こそが何よりも相手を人間として扱うことである，という意味において，私は，自分がナガ村の人びとから，ひとりの人間として，いわばあるがままの姿において認識されたことを，深い悦びをもって想い出さずにはいられないのです。

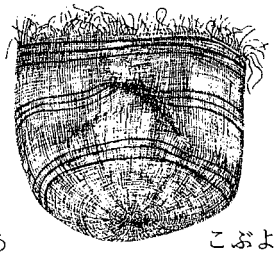
ナガ村の人びとが，このような人間観を持っているとすれば，私が出会ったあの農夫とその家族も，農作物の収穫が皆無だったからといって，ただちに餓死するほど生命の危機に当面していたなどと考えることはできません。恐らく，ナガ村の人びとは，貴重な地酒によって私たちを歓待したのとおなじ態度をもって，あの農夫とその家族が必要とする食料を，自分たちの乏しい収穫のなかから分かち与えたに違いありません。

そうした推測を裏づけるかのように，あの農夫は「雨季の到来を正確に読み取ることができなかった」とは話しましたが，「食料がないので家族も飢えることになる」などと私に訴えたのではなかったのです。

それならば，あの農夫は，いったい何を，あれほどまでに深い悲しみをもって私に訴えようとしたのでしょうか。

ここで，私たちは，「雨季の到来を正確に読み取ることができなかった」という農夫の言葉を想い出さなければなりません。つまり，彼は，それまでの乾季が終わって，雨季が始まるという「自然の変化」を読み取り，それを適確に予測することに失敗したことを悲しんでいるのです。

しかし，すでに申しましたように，彼とその家族が食料不足によって，ただちに飢え死にするようなことは考えられないのですし，そのうえ，たとえ昨年は雨季の到来を正確に予測することに失敗したとしても，今年の予測が適確であるならば，それほどまでに悲しむことはない，とも思われるのです。



それでは，彼は，その失敗をなぜ，あれほどまでに悲しみ，自分を責めなければならなかったのでしょうか。自然の変化を予測することに失敗したことは，あの農夫にとって，ただ単に，自分の家族が必要とする食料などが自給できないという以外に，いったいどのような深刻な問題があるというのでしょうか。

このように考えると，彼らアフリカ人農民が，自然というものをどのように見ているのか，自然に対する彼らの考え方が，どのようなものなのかということに考えが及ばざるをえなくなる，と私には思われるのです。

そこで，つぎに，私の想像をまじえながら，彼らの自然観とはどのようなものなのか，という難しい問題に迫ってみることにしたいと思います。

## ●アフリカ人農民の自然観

ご承知のように，ガーナは，世界でも有数のココア豆の産地として知られておりますが，ある研究者の報告によりますと，すでに1900年頃のガーナでは，ココア樹の若葉に赤痢とか下痢を治す薬効成分の含まれていることが，広くココア栽培農民のあいだで知られていたということです。

今日のように，化学とか薬学が発達した時代であれば，化学者などがその薬効成分を発見しても不思議ではありませんが，そうした化学分析に必要な技術も知識もなかった当時のガーナの農村において，ごく普通のアフリカ人農民が，それを知っていたということは，必ずしも不思議なことではないにしても，それがどうして可能であったのかという疑問はごく自然に出てくるのではないでしょうか。このばあい，仮に，ココアの若葉に薬効があることを示す「看板」とか「効能書」のようなものが付いているのなら，ことは簡単にはこぶように思われますが，それでも，最初にその薬効を誰かが発見したはずであり，どのようにして発見されたのかということが依然として，未解決のままに残ってしまうのです。

いま私は，その薬効は誰かが発見したはずだ，などと申しましたが，たとえ，それが誰かによって確認されたとしても，いっぽうでは，それを服用する人間の消化・吸収能力に応じて，他方では，ココアの若葉が成育する土壌や採取される季節，あるいは加工・抽出方法などという諸条件の差によって，薬効の程度にも差が生じるに違いありません。その意味から，ココア樹の若葉に薬効成分が含まれていることは，ほとんど偶然に，ある特定の人間によっていわば主観的に実感されたものであるといってもよいのではないでしょうか。

そして，これと同じことが雨季の到来を正確に予測するのに成功したと考えるか，それとも失敗したとみるか，などという実感的な判断のばあいにも言えるのではないかと思います。

なぜかと申しますに，私の出会ったあの農夫が，たとえ，雨季の開始を正確に予測し，その後必要とみられる農作業をほとんど完璧に行なったとしても，乾季における大気の乾燥が，土壌とか種子などにどの程度の影響を与えたかによって，雨季の到来とともに行なわれる農作業の効果にも，大なり小なりの差が生じるのは，むしろ当然のことであると考えられるからなのです。

言い換えるなら，収穫物という労働の成果は，ただ単に，彼が雨季の開始をどれほど正確に予測しえたかということだけではなく，雨季に先行する乾季において，彼がどこまで周到で精緻な作業や準備を行なったのかということによっても，きわめて大きな影響を受けるに違いないということなのです。

しかし，彼らにとっては，毎年，雨季と乾季が交互に到来することを確信することはできるにしても，雨量や乾燥度はもちろん，それらの地域的な差異などのような個々の畑に対する具体的な影響の程度まで，それらを事前に予測することは，ほとんど不可能にちかいのです。

こうして，それがくることが確実に予測できるにもかかわらず，具体的には未知なものに対処する方法は，何よりも過去の個別・具体的な経験によって，それを学びとるよりほかにないのです。

ところが，雨季において彼らが顧みて学びとろうとする過去の経験としての乾季におけるさまざまな準備作業には，たとえば，種子の貯蔵・保存ひとつをするにも，その種類や保管場所に応じて過度に乾燥したり虫害を防止するために，さまざまな工夫をこらす必要があることからも明らかなように，ほとんど際限のないほど多くの条件を考慮に入れた作業が行なわれなければならないのです。

したがって，私が出会った農夫のように，凶作とか不作に当面すれば，彼らは常に，自分の準備作業が不十分だったのではないかという自責の念を強く感じるのではないでしょうか。

このように，自責の気持をもって，自らの経験を顧みるからこそ，地中にうごめく小さな昆虫とか一木一草に対してまでも，彼らは，鋭敏で精緻な観察を行なってきたのであり，そうした歴史の積み重ねのなかから，万物に対する「無限抱擁的」ともいえるような態度が生み出されてきたのではなかったのかと思われるのです。

人間を含む自然の万物を，少なくとも自分自身との関係においては未知の存在とみなすことは，対象をその形態において，いわば物質として皮相に認識するのではなく，むしろ，精神という内面において捉えようとする態度にほかならないとするならば，物質文明の社会にあって，ややもすれば失いがちな人間としてのバランスを回復するうえで，私たちがアフリカ人農民の自然観から学ぶものは，決して少なくはないと私は考えるのです。

（ほそみ・しんや／調査研究部）